

Title	夏目漱石「倫敦塔」論
Author(s)	尾上, 新太郎
Citation	大阪外国語大学論集. 13 p.97-p.106
Issue Date	1995-09-29
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79675
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

夏目漱石「倫敦塔」論

尾上 新太郎

An Essay on Soseki Natsume's Novel "Rondon-To (The Tower of London)"

Shintaro OGAMI

How can we overcome nihilism?
How could Soseki Natsume overcome it?
I discussed about these matters in the work.

夏目漱石の小説「倫敦塔」の主人公は、「余」という一人称の形で登場する。だから、我々も、彼のことを適宜、以下「余」と呼ぶことにしよう。

「余」は、二年間のイギリス留学中に、唯一度だけロンドン塔を訪れたことがあるという、再訪の機会があったのだが、あえてしなかったと。一度目で得た記憶が、深く、異様に心を打ったからである。

では、そこで何があたか。

「余」はいう。

倫敦塔の歴史は英国の歴史を煎じ詰めたものである。過去と云ふ怪しき物を蔽へる戸帳が自づと裂けて龕中の幽光を二十世紀の上に反射するものは倫敦塔である。凡てを葬る時の流れが逆しまに返って古代の一片が現代に漂ひ来れりとも見るべきは倫敦塔である。人の血、人の肉、人の罪が結晶して馬、車、汽車の中に取り残されたるは倫敦塔である¹⁾。

時の流れは、全てを葬り去る。この世の全てのものは、早晚時の流れに葬り去られ、無化する。だが、ロンドン塔は、時の流れを逆流させる、そのように「余」の心中に、屹立する。悲惨な過去の歴史を、ロンドン塔は、想起せしめる。文明の進歩などおかまいなしだ。不気味につっ立ち、過去のイギリスの歴史、ひいては人間の歴史の暗澹とした相を、「余」に提示する。

「余」がロンドン塔を訪れたのは、イギリス・ロンドンに行って間もない頃である。因みに、漱石が留学の為にロンドンに到着したのは、日記によると、1900年10月28日、ロンドン塔を訪れたのは、三日後の10月31日のことである²⁾。

常識的な話だが、小説「倫敦塔」におけるロンドンの街中の描写は、行って間もないころの漱石の体験を踏まえているとされる。

ところで、当時のロンドンには、世界有数の近代的大都市、片や「余」は、極東の発展途上国・日本の人間、いわば、“田舎者”である。

「余」はこういっている。

行ったのは着後間もないうちの事である。其頃は方角もよく分らんし、地理杯は固より知らん。丸で御殿場の兎が急に日本橋の真中へ抛り出された様な心持ちであった。表へ出れば人の波にさらはれるかと思ひ、家に帰れば汽車が自分の部屋に衝突しはせぬかと疑ひ、朝夕安き心はなかった。

発展途上国の人間が、近代文明の最先端をいく国の首都に行つて、右往左往したさまがやや大袈裟に描かれている。

「余」は、一人では汽車にも馬車にも乗れなかったという。手助けしてくれる人とてなく、止むを得ず、

四ツ角へ出る度に地図を披いて通行人に押し返されながら足のむく方角を定める。地図で知れぬ時は人に聞く、人に聞いて知れぬ時は巡査を探す。巡査でゆかぬ時は又他の人に尋ねる、何人でも合点の行く人に出逢ふ迄は捕へては聞き呼び掛けては聞く。

このようにして、目的地にやっと辿り着くありさまだった。

再言することになるが、「余」は、イギリス・ロンドンに行つて、少なくとも初めの頃は、汽車・電車などの文明の利器を利用することができなかった。大都会の喧騒さに悩まされ、大群衆に威圧され、二年住んでいたら、神経が「鍋の中の麴海苔の如くべとべとになるだろう」、まいってしまうだろう、と思われたのだった。

「余」は“田舎者”だ。しかし、あなどつてはいけない。この“田舎者”は、自己をもっている、それなりにちゃんと。近代都市・ロンドンを、近代文明を、近代人を、彼は肯定しているわけではない。批判的なのだ。ロンドン塔の印象が、如実に彼にそういう態度をとらせる。ロンドン塔の印象は、彼に、後々まで強烈に残った。塔への行き帰りのルート、そういうのは一向に判然としないのだが――。

只「塔」を見物した丈は慥かである。「塔」其物の光景は今でもありありと眼に浮かべる事が出来る。前はと問はれると困る、後はと尋ねられても返答し得ぬ。只前を忘れ後を失したる中間が会釈もなく明るい。

どうしてそんなに、「余」に、ロンドン塔はインパクトを与えたのだろう。ロンドン塔は、「冷然と二十世紀を輕蔑する様に」つつ立っていた、という。又、

汽車も走れ電車も走れ、苟も歴史の有ん限りは我のみは斯くてあるべしと云はぬ許りに立って居る。

こういう印象だった。歴史の中にあつて、超歴史的に、ロンドン塔はつつ立っている。そのように「余」には思われたのだった。何かしら、歴史の実相をロンドン塔は開示するもののように思われたのだった。返す刀でいえば、近代は歴史というものの実相に眼を覆っている。輕薄である。

さて、「余」に従って、ロンドン塔の内部に入ってみよう。

空濠にかけてある石橋を渡って行くと向ふに一つの塔がある。是は丸形の石造で石油タンクの状をなして恰も巨人の門柱の如く左右に屹立した居る。其中間を連ねて居る建物の下を潜って向へ抜ける。中塔とは此事である。

念の為いえば、「中塔」(Middle Tower) とあるのは、「側塔」(Byward Tower) の間違いである。この点すでに指摘されている³⁾。

側塔から少し行くと、「鐘塔」(Bell Tower) である。又少し行くと右手に「逆賊門」(Traitor's Gate)。門上に「聖タマス塔」(St. Thomas's Tower)。「余」の眼は逆賊門にとまる。

逆賊門とは名前からが既に恐ろしい。古来から塔中に生きながら葬られたる幾千の罪人は皆舟から此門迄護送されたのである。彼等が舟を捨てゝ一度び此門を通過するや否や娑婆の太陽は再び彼等を照らさなかった。

この後、「テームスは彼等にとっての三途の川で此門は冥府に通ずる入口であつた」とあるが、出口保夫『ロンドン塔』（1993年7月、「中公新書」）によると、「実際には『塔』を釈放されて生き延びた人びともまたおびただしく多かつた」ようである。その意味では、漱石は、大袈裟に話をしていることになる。もっとも、知識不足の故とされないこともない。しかし、そう断定もできない。後で、このことについては再言する。因みに、出口保夫『夏目漱石とロンドンを歩く』（1993年2月、「PHP文庫」）によると、「この『逆賊門』の建造は、十三世紀末のリチャード二世の手にな

るものである。しかし最初からこの門は逆賊専用の出入口として建てられたものではなく、テムズ河からこの城に入る際の城門であった」。又、「ここが逆賊の護送門として使われ出したのは、16世紀からだといわれている」という。

さて、「余」は、左へ折れて「血塔」(Bloody Tower) へ。血塔の描写はリアルだが、「余」はそこの中へは入らなかったようだ。この点、越智治雄「ロンドン塔再訪」(『文学』第41巻第4号、1973年4月、岩波書店)に詳しい。尤も、実際の漱石は入ったとした方がいい。内部の描写がやけに詳しい。小説では、外部での幻想という形でエドワード四世の二王子の悲劇が語られる、こう理解されるのだが。

「余」は、血塔の下をくぐり広場へ出、「白塔」(White Tower) へ行く。ついで「ボーシャン塔」(Beauchamp Tower) へ。

「ボーシャン塔」のくだりは、この小説の、いわばハイライトだ。又、作家・漱石における書く行為の問題が覗いている、とされる。よく考えてみよう。

因みに、「ボーシャン塔」の「ボーシャン」は「ビーチャム」が正しいという説がある(前掲出口『夏目漱石とロンドンを歩く』参照)。だが、又異論もある(塚本利明『「倫敦塔」の背景』、『漱石作品論集成〔第四巻〕濊虚集・夢十夜』1991年5月、桜楓社、参照)。私には決しえない問題であるが、参考までにいえば、今日の“ビーフ・イーター”達は、「ビッチャム」、「ビィチャム」、そんな感じに発音している(但し、私の耳での話なので、ごく参考までにということで付す)。

さて、

倫敦塔の歴史はボーシャン塔の歴史であって、ボーシャン塔の歴史は悲酸の歴史である。

こうある。「倫敦塔の歴史は英国の歴史を煎じ詰めたものである」と前にあった。それなら、ボーシャン塔の歴史は、イギリスの歴史、そういうことになる。そして、イギリスの歴史とは悲惨の歴史である。さらにいえば、人間の歴史というものが悲惨の歴史である。「余」の思いは、そこまでいっているといえるように思う。

ところで、ボーシャン塔についてこうある。

此三層塔の一階室に入るものは其入るの瞬間に於て、百代の遺恨を結晶したる無数の記念を周囲の壁上に認むるであらう。

ここでいう「一階室」は、イギリスでいうグランドのこととされるが、そこには、そんなに多くの囚人達の“落書”はない。いかにも漱石は、大袈裟に書いていると思う。前にも大袈裟な表現が見られたが、どうも気になる。俗っぽい表現の印象を受ける。だが素直に、そのように理解するのが筋なのかもしれない。とは、この小説の提示する人生問題の深刻さを思っていることである。

ともかく、「余」は、壁上の“落書”に深く心を奪われたという。それに従おう。だが、そういう“落書”を壁上に残したところで、それが何になるというのだ。まず「余」は、そんなことを思う。

冷やかなる鉄筆に無情の壁を彫ってわが不運と定業とを天地の間に刻み付けた人は、過去といふ底なし穴に葬られて、空しき文字のみいつ迄も娑婆の光りを見る。彼等は強ひて自らを愚弄するにあらずやと怪しまれる。世に反語といふがある。白といふて黒を意味し、小と唱へて大を思はしむ。凡ての反語のうち自ら知らずして後世に残す反語程猛烈なるはまたと有まい。墓碣と云ひ、記念碑といひ、賞牌と云ひ、綬章と云ひ此等が存在する限りは、空しき物質に、ありし世を忍ばしむるの具となるに過ぎない。われは去る、われを伝ふるものは残ると思ふは、去るわれを傷ましむる媒介物の残る意にて、われ其物の残る意にあらざるを忘れたる人の言葉と思ふ。未来の世迄反語を伝えて泡沫の身を嘲る人のなす事と思ふ。余は死ぬ時に辞世も作るまい。死んだ後は墓碑も建てゝもらふまい。

「余」は思う、記念碑を残そうが何を残そうが、死んだものは死んだものである、と。かえって、それを残すとは、死者を死者として傷ましめる媒介物を残すことになる。何も、命が長らえる話ではない。このことに囚人達は気付かなかったか。気付かなかったのなら、あわれこの上ない。あるいは、気付いていたか。それなら、彼等のやったことは自嘲である。このように「余」は思う。

ところで、ボーシャン塔のくだりを越智治雄が、『濑虚集』一面』（『漱石私論』1971年6月、角川書店、所収）において、漱石の書く行為の問題と絡めて熟考している。越智に学ぶ。

自分を伝えるものをこの世に残したところで、「去るわれを傷ましむる媒介物の残る意にて、われ其物の残る意にあら」ずと「余」は知っているわけだが、越智はこの点を捕え、「確かに、人の生の持っている重みに比べれば、ついに文字はむなしのかもしれない」という。そして、「しかし漱石もまた目に見えぬ牢獄に『生きながら葬られた』存在だった。『生きる』といふは活動して居るといふ事であるに、生きながら此活動を抑へらるゝのは生といふ意味を奪はれたと同じ事で、その奪はれたを自覚する丈が死よりも一層の苦痛である』。外部の現実を暗鬱な目で見つめている漱石にも、当然その苦痛はあったと言ってよい。かくしてなおなぜ自分は生きるのか」と続ける。

越智は、「漱石が文字の上で試みようとしている倫敦塔訪問こそ、彼の真の、唯一の訪問である」とする。作者・漱石にとってのロンドン塔訪問の意味を、越智は考察するのである。漱石の実際のロンドン塔訪問が、その素材になっていることはいうまでもないが、作家としての漱石の文字の上でのロンドン塔訪問というのは、一直線にそれから割り出せるものではない。この越智の考えは正しい。

ところで、「漱石もまた目に見えぬ牢獄に『生きながら葬られた』存在だった」という言葉が越智にあった。このことは、つきつめていえば、漱石のニヒリズムを意味する。漱石の虚無感がこの

小説には顔を覗かせている。それなら、漱石は、それに対してどういう態度をとったのだろうか。このことと、作家として書くことの問題はどう関係しよう。私にとって、興味ある問題である。本文中こうある。

一度此室に入るものは必ず死ぬ。生きて天日を再び見たものは千人に一人しかない。彼等は遅かれ早かれ死なねばならぬ。去れど古今に亘る大真理は彼等に誨えて生きよと云ふ、飽く迄も生きよと云ふ。彼等は已を得ず彼等の爪を磨いだ。尖がれる爪の先を以て堅き壁の上に一と書いた。一をかける後も真理は古への如く生きよと囁く、飽く迄も生きよと囁く。彼等は剝がれたる爪の癒ゆるを待って再び二と書いた。斧の刃に肉飛び骨摧ける明日を予期した彼等は冷やかなる壁の上に只一となり二となり線となり字となって生きんと願った。

越智はこのくだりについて、「語を重ねるまでもなく、生きることは書くことだったのだ。最も確実な死を見すえながら、多分漱石もまた一と書き、二と書こうとするのである」といっている。囚人達にとって、生きるとは書くことだった。そして同様に、漱石にとっても、生きるとは書くことだったのである、このようなことを越智はいっているわけだ。広い意味では、そういうことだろう。換言すれば、書くことの原点ということでは、囚人達と漱石は同列に並ぼう。

こんなくだりがある。

凡そ世の中に何が苦しいと云って所在のない程の苦しみはない。意識の内容に変化のない程の苦しみはない。使へる身体は目に見えぬ縄で縛られて動きのとれぬ程の苦しみはない。生きるといふは活動して居るといふ事であるに、生きながら此活動を抑へらるゝのは生といふ意味を奪はれたると同じ事で、その奪はれたるを自覚する丈が死よりも一層の苦痛である。此壁の周囲をかく迄に塗抹した人々は皆此死よりも辛い苦痛を嘗めたのである。忍ばるゝ限り堪へらるゝ限りは此苦痛と戦った末、居ても起ってもたまらなく為った時始めて釘の折や鋭どき爪を利用して無事の内に仕事を求め、太平の裏に不平を洩し、平地の上に波瀾を画いたものであらう。彼等が題せる一字一画は、号泣、涕涙、其他凡て自然の許す限りの排悶的手段を尽したる後猶飽く事を知らざる本能の要求に余儀なくせられたる結果であらう。

「生きるといふは活動して居るといふ事」とある。だから、牢獄に入れられ、その活動を停止させられているものは、「生といふ意味を奪」われているのと同じことである、生きているのに、事実上死の状態にある、このことは、死を意識せざるをえぬという点で、実際の死より苦痛である、という。囚人達の書く行為は、そういう彼等の生の活動としてのものである。彼等にとっての書く行為は、生の活動である。無論、「生といふ意味」とは、活動のことである。活動たる生それ自身の意味というようなこととは、別問題である。越智によれば、漱石の書く行為もまたこの次元のこと

となる。即ち、作家・漱石にとっても、書くとは生の活動のことであった。この考えが間違っているというのではない。ということで、思い出すのは、漱石の『文学論』第二編第四章中の以下のくだりだ。

活動禁止の状態極度に達すれば吾人は生と云ふ名ありて其实を失ふに至る。凡て人生の根本問題は生其物にあり、而して其生の内容は此活動に存するを以て、若し此活動四囲の事情により圧迫せらるゝか或は全く消滅する事ありとせば、此時吾人は生なるものゝ保証を奪はるゝが如き心地ならざる可からず。されば囚人の最も怖るゝは苦役にあらず労働にあらず、また看守の鞭撻にあらず、たゞ暗室禁錮にあるのみ。彼は暗室に端坐して悠々無事なるべきに、これを以て凡ての苦楚以上の苦楚と感ずるは、全く此生命の内容たる活動の意識を絶対に禁止せらるゝが為なり⁴⁾。

要するに、越智のいうことは正しい、ととまれいえる。漱石にとって、生とは生の活動のことだった。このことの現われとして、囚人達においても漱石においても、書くということがあった。そういう彼等——無論漱石もここに入る——の背景に、人生の虚無の問題があった。凡そ、越智の考えはこういうものである。もう少し、越智に学ぶ。

越智の「倫敦塔再訪」(既出)をみってみる。こうある、「余が深く思いめぐらすのは『生といふ意味』であるが、やがて、『彼等が題せる一字一画は、号泣涕涙、其他凡て自然の許す限りの排悶的手段を尽したる後猶飽く事を知らざる本能の要求に余儀なくせられたる結果であろう』と、他の生の営為によっては代替できぬ、書くこと自体が問題となってくる。おそらくこうした『本能の要求』は漱石の内部にも強く働いていたものなのである」。

虚無を見据えた上で、猶あくなき生存本能の要求に従う、漱石の書く行為はそこに出る。この越智の考えに、まず私も従うものである。但し、詳しくは、生の理想の問題が漱石にはあり、話は単純でない。生存本能が、その意味で、全的に漱石において肯定されていたわけではない、とされる。これは見易い事実で、その意味で、越智においては、私のいうようなことは自明とされていたのかもしれない、ともされる。ともかく考えてみよう。

壁の上に残る横縦の疵は生を欲する執着の魂魄である。

と「余」がいう時、書く行為は、直截に生存本能の現われであるものである。本能的生命欲の満足をそういうことで囚人達は直接果そうとした。で、越智はいう、「文字となって生きようとした彼らについて思いを潜める余を通じて、漱石は書かずにいられなかった自身を意識化している」、「深い内部の塔において、余は書くことにこめられた生の意味を見いだして『存在の自覚』を果たした。漱石もまた、囚人たちと同様に、書く行為とともに生をひき受けようとしているのではないか」。

本文中、以下のくだりもある。

生れて来た以上は生きねばならぬ。敢て死を恐るゝとは云はず只生きねばならぬ。生きねばならぬと云ふは耶蘇孔子以前の道で、又耶蘇孔子以後の道である。何の理窟も入らぬ、只生きたいから生きねばならぬのである。凡ての人は生きねばならぬ。此獄に繋がれたる人も亦此大道に従って生きねばならなかった。同時に彼等は死ぬべき運命を眼前に控へて居った。

一般に我々は、囚人達のように自己の死を眼前に据えて生きているのではない。だが、我々も早晚死ななければならぬ。そういう運命にある。死は、生者にとっての厳然たる、絶対に将来、避けることのできない事実である。そのことを思えば、この世の全てはむなしとなる。そもそも、何の為の生か。そもそも、我々はどこから来てどこへ去って行くのか。全ては無化する。そして、我々の日常も悲惨ではないか。だのに、我々は生きようとする。生きんとする衝動に闇雲に駆られ、である。生きているとは、生きたいということだ、生き続けたいということだ。生者にとって、これは生の大道というべきものである。人生は虚無なのに、である。そこに、漱石の書く行為があった。即ち、生のその大道に則って、漱石は書く。

人生は虚無である。だが、そのことを見据えた上で漱石は書く行為に出た。こういう時、漱石のそのありようは、囚人達のそれと重なる。このように越智は考える。このことを否定するのではない。但し、漱石の書く行為に関しては、厳密には、もう少し木目細かく考えるべきではないかと思うのである。

山田晃『『濠虚集』一面観』（『古典と現代』27号、1967年10月、古典と現代の会）中、『生を欲する執着の魂魄』は塔内の幽囚にのみ頒ちあたえられているのではない。『生きねばならぬ』という『大道』に従って『凡ての人は生きねばならぬのである。』幽囚が壁上にいのちを刻みつけるように、無事の人々もそれぞれの運命に従ってなにがしかの傷あとを何物かに彫りつけて死んで行くのであろう。文化といい、文明というのも、所詮はそんな人間の宿業の仮名ではないか」とある。傾聴に価する。生きている人間は、どこまでも生きたいと欲する。文化・文明も、結局そういう人間の業の結果である。山田は、『『倫敦塔』は永遠に文明の薄皮の剝奪者として屹立する』ともいっている。そのように「余」、ひいては漱石に受けとめられたというわけである。

ここで私は、漱石の「文芸の哲学的基礎」⁵⁾にふれたい。漱石はこんなことをいっている。我々には生存本能というのがある。生きているとは、いつまでもどこまでも生きたいということである。このことを意識の面から説明すると、意識はその属性として連続的傾向を有するということである。単なる連続は無意味である。そこには、意識の内容の変化がいる。又、どのような順序で意識を連続させていくかの問題もある。これらからして、理想が出る。

漱石のいうことは少々分りにくい。要するに、彼がいたいのは、人間は生ある以上生を欲するものだが、そこには生の選択というのが働き、さらに、当然的に理想の問題が入るということであ

ろう。つまり、理想的生、そういうのが問題として出るということで、このことを意識の点から、漱石は説明する。

意識は、特徴的にいえば、知・情・意に分かれる。文芸家は情的人間である。この情的人間の表現上の理想として、真・美・善、そして荘の四種が考えられる。つまりは、人間一般の生の理想でも、それらはある。

このように考えるものの生を、単純に生存本能上のものとして、それで終わるというようなことは蓋しできない。特に私が問題にしたいのは、荘の理想である。荘は、詳しくいえば、荘厳ということで、国・人、宗教上の道、こういったものの為に意志を動かせ生きるもののもたらす感動をその言葉で、漱石は説明するのである。こういった生は、換言すれば、自己犠牲的生に他ならない。自己犠牲的生は、応々にして、肉体的生の否定を要請されるものである。つまり、精神的生の為に、自己の（肉体の）死を肯定せざるをえない、そういうことに応々してなる。漱石の言葉でいえば、ヒロイズムである。こういう生も漱石は問題にするのである。単純に、そういう意味では、囚人達の書く行為と、漱石のそれとを重ねることはできないだろう。原点において共通するとはいへ、である。「倫敦塔」においても、このような生が端的に描かれているくだりがある。即ち、「ジェーン・グレー」(Jane Grey)の話がそれである。ボーシャン塔の一階——イギリス流の——に、二ヶ所今も「ジェーン」(JANE)の文字を認める。尤も、ジェーンが刻んだものとは信じられていない。同塔で私が貰ったパンフレットによると、夫か彼等の支持者の手になるものと推測されているようである。実際誰が刻んだかについては、漱石はふれていない。これは賢明な処置だ。

ところで、ジェーンについて、漱石はこう書く。処刑直前の話である。彼女は義父と夫の野望の犠牲になった。

「わが夫ギルドフォード、ダッドレーは既に神の国に行ってか」と聞く。肩を揺り起こした一握りの髪が軽くうねりを打つ。坊さんは「知り申しぬ」と答へて「まだ真との道に入り玉ふ心はなきか」と問ふ。女屹として「まことゝは吾と吾夫の信ずる道をこそ言へ。御身達の道は迷ひの道、誤りの道よ」と返す。坊さんは何にも言はずに居る。女は稍落ち着いた調子で、吾夫が先なら追付う、後ならば誘ふて行かう。正しき神の国に、正しき道を踏んで行かう」と云い終って落つるが如く首を台の上に投げかける。

「まだ真との道に入り玉ふ心はなきか」と坊さんが問うたというのは、これは改宗のすすめである。もし、ジェーンがプロテスタントからカトリックに改宗したら、彼女の命は助かったのである。これは、ライバルで時の女王・メアリーの恩情といえは恩情だった。しかしジェーンは拒絶した。そして死んでいった。自分の信じる道の為にである。漱石が生の一つの理想とするヒロイズムの例である。

こういうことからして、生存本能を原点とするものとはいへ、漱石の書く行為乃至その生を、一

言で論じることとはできないのである。

又、以下のようなことも私は考える。

漱石は、莊嚴の感を与える生を意志の発動の点での理想とする。換言すれば、自己犠牲的生を説くのである。その究極は肉体的生命をみずから断つものである。だが、その生も、生存本能を克服しているとはいえ、死の意味とか死の救済性を提出しえているものではない。やはり一種高尚とはいえ、人間の我の範疇を出ていないとされるものである。

仏教においては、精神的生も業の立場を出ないとされる⁶⁾。虚無とは、仏教に学んでいうことだが、我々人間が、何であれ生に執着すればこそそのものである。その執着は、業故である。ということなら、業の克服こそ虚無の克服となろう。

漱石「倫敦塔」に、我々は人生の虚無を見る。それに対して、漱石はどう対処したか。先述の如く、漱石は、要するに、業的生をもって応じるものである。本当は、業的生の否定をこそ追及すべきである。換言すれば、仏教の空の立場こそ説かれるべきである。無我・無心、そういうことこそ問題にすべきとしてもいい。

しかし、業を命あるものが、果して克服しうるだろうか⁷⁾。こう問うところに、私は、人間の直面する最も深刻な問題があると思う。人間にとって、就中近代の人間にとって、それは難問中の難問である。結局、「倫敦塔」の囚人達や作家・漱石のように、業に従う他ないのか。

もっとも、厳密には、即自的に業に生きることと、業に生きる自己を自覚して生きることとの間には、人間の生き方の上で質の違いがあるように思う。

漱石の書く行為の問題を考えた場合、彼は、書く行為を含め、人間の行為一般を一度、徹底して否定してみる必要があったとされる。その後の漱石においては、この問題はどうなっていく。別稿を期したい。

注

1) 「倫敦塔」の引用は、全て『漱石全集』第2巻（1994年1月、岩波書店）による。

2) 『漱石全集』第13巻（1966年11月、岩波書店）。

3) 『漱石文学全集』第2巻（1970年8月、集英社）注解。

4) 引用、『漱石全集』第9巻（1966年8月、岩波書店）。

5) 『漱石全集』第11巻（1966年10月、岩波書店）を用いた。

6) この辺の仏教思想については、主に西谷啓治『宗教とは何か 宗教論集1』（1961年2月、創文社）に学んでいる。

7) 以下は浄土教を念頭においてのものである。

猶、全ての文献の引用に当って、表記、漢字の字体等、適宜勘案した。

（1995. 5. 10 受理）